

学びの源泉 三谷 宏治

第40号 エレベーターの罨

#深夜、自宅マンションのエレベーターにて

もう10数年も前のこと。マンションの2階に住んでいた私は、深夜帰宅しエレベーターに乗った。

いつもは、使わない。

たった1階分、階段を駆け上がるのを惜しむのは、ちょっと疲れて深夜に帰宅したときだけだ。その日もそう。

エレベーターホールで△ボタンを押した瞬間「ああ、ちょっと疲れてるんだな」と、自分の疲れを自覚させられて、少しだけ気分が悪かった。一瞬迷ったけれど、エレベーターがすぐに来たので乗った。

10秒も経たず2階に着く。

…でもドアが、開かない。

暫く待つ、が開かない。ちょっと揺らしたりしてみる、が開かない。

仕方ないなあ、とエレベーター内の非常ボタンを押す。呼び出し音が聞こえる。マイクラシキ場所に向けて話しかける。「もしもーし」

何の応答もない。しかも携帯電話も持っていない。

ここで流石に「ヤバイ」と感じ始める。ちょっと触ってみるがドアは動かない。幸いドアはガラス窓付きで、外が見える。でも深夜で誰も前を通りかからない…。大声を出せばお隣さんたちが、気が付くかも知れないなあ。

結局、通りかかる人を待つことにする。最悪は、朝までだ。

30分後に男性が一人通りかかる。私はドアを叩いてその人に呼びかける。「ドアが開かない。204号室を呼んで下さい」

慌てて出てきた家人にエレベーター会社（OTIS）に電話して貰う。番号はエレベーター内に書いてあ

った。0120-……。

数分後、家人が戻ってきて曰く。

「ドアを強く引いたら開きますよ、ってさ」

その通り、エイッて強く引っ張ったらドアはノロノロ素直に開いてくれた…。あーあ。

それにしても、非常ボタンに誰も反応しないってのはマズイよねえ。

#金曜夜、超高層ビルのエレベーターにて

次は1999年に、ビジネス・ウィーク誌で働く34歳の男性に起こった悲劇。

彼のオフィスは43階。同僚と共に深夜残業を敢行していた彼は、11時過ぎ、タバコを吸いに1階へ降りた。

数分後、一服から戻ってまたエレベーターに。

このエレベーターは30階まではノンストップ。のはずだったが、彼一人を乗せたまま、敢えなく13階付近で停止してしまった。

彼が救助されるまでの一部始終は、監視カメラのビデオに全て残っている。

最初の1時間。彼はインターホンや非常ボタンを押して外部に連絡を試みるが返答無し。ドアを開けてみる（エライ！）が、その向こうは壁。よじ登って天井の非常口を開けようとするが、カギが掛かっている開かず。…映画とは違った。ドアをバンバン叩いて呼びかけるが、これも返答無し。

ここでちょっと一休み。意を決して（禁煙のエレベーター内で）タバコを吸ったりもする。次の1時間も同様。いろいろ試みるが、もう手詰まり。

待つしかないか、で、彼は狭いエレベーターの床に座ったり寝転んだり。それでまた数時間が過ぎる。

この間のことは全て、ビル管理室のモニターに映し出されていた。4分割画面の右上に彼の苦悶と諦念とが映っていた。

でも、誰も気が付かなかった。8名いた管理員の誰一人として。

時計も携帯電話も持っていなかった彼は、段々と時間の感覚を失う。

何時間経ったのだろうか？ 一体なぜ、誰も助けに来ないのだろうか。もう朝になったはずだが、このエレベーターが動かないことを、なぜ誰もおかしいと思わないのだろうか。外界に何かの途轍も無いことが起きたのだろうか。

エレベーターの中には昼も夜もなく、音もなく動くものもない。食べ物も水もなく、このままでは確実に脱水症状に陥るだろう。

閉じ込められてから24時間、彼は遂に「死」を意識し始める。

その究極の状況の中でしかし、彼は更に丸一日を過ごすことになる。

ビル管理会社がエレベーターの故障に気が付き、彼が助け出されたのは、結局、日曜の夕方。なんと41時間が経っていた。

#Nicholas Whiteのハマった罠

彼の名前はニコラス・ホワイト(Nicholas White)。救助直後、置きっぱなしだったジャケットを取りに43階の職場に戻った彼を待っていたのは、同僚からの長い長い抗議文。

一緒に深夜残業していたその同僚は、彼の突然の

「失踪」に怒り心頭。抗議文を彼のPC画面に貼り付けていった。周りのみんなに見えるように。

なんと理不尽な。でも同僚を責めても仕方がない。

とぼとぼ家に帰って、一息ついて、彼が決めたこと。それは、エレベーター管理会社とビル管理会社への訴訟だ。

そのまま職場には復帰せず、2ヶ月の海外旅行に出て精神を癒し、会社を辞め、そして訴額25万ドルの訴訟戦に打って出た。

4年の法廷闘争の後、和解により（おそらく）彼は1億円弱の和解金を手にした。

しかし結局、事故原因は分からず、彼は出版業界での職を失ったままだ。得たお金も使い果たし、昔の同僚たちとの繋がりも絶えてしまった。

事件から9年経った今、彼は振り返る。

“あの時のトラウマ（死の恐怖）は乗り越えた。しかし、なぜすぐ職場に復帰せず、訴訟戦にのめり込んでしまったのか。それが、悔しい。”

彼が掛かった本当の罠は、エレベーターそのものでなく…

これらのお話の教訓は何だろう？

少なくとも三つ。

- ・なるべく階段を使おう
- ・エレベーターのドアは強く引けば開く
- ・エレベーターに長時間閉じ込められることがあり得る¹

それ以上の点は、皆さんの感じたままに。責任追

¹ 05年7月の千葉県北西部地震では、首都圏のエレベーター6.4万台が停止した。しかし保守人員は2500人のみ。最高3時間50分の閉じ込めが発生した

及の意味と、日常を取り戻すことの価値。

その軽重を、間違えないように。

出所：THE NEW YORKER（オンライン版 4/21/2008）

<http://www.newyorker.com/reporting/2008/04/21/>

[080421fa_fact_paumgarten?currentPage=all](http://www.newyorker.com/reporting/2008/04/21/080421fa_fact_paumgarten?currentPage=all)

[http://www.newyorker.com/online/video/2008/04/21/](http://www.newyorker.com/online/video/2008/04/21/080421_elevators)

[1/080421_elevators](http://www.newyorker.com/online/video/2008/04/21/080421_elevators)

初出：CAREERINQ. 2008/05/15